人文学の基本システム

―講義録「民俗学概説」第１講―

真　野　俊　和

At the University of Tsukuba, I give lectures on "Introduction to Japanese Folklore" to undergraduate students. This paper is a transcript based on the beginning lecture.

I compared two types of studies. They are highly theorized studies and not-highly theorized ones. In the first type there are included natural sciences and some social sciences. The second type consists mostly of humane studies.

The former is so systematic that academic institutes and educational methods are organized to a high degree. Students generally study through textbooks that give perfectly established theories, and the students become scholars. Their scholarly works are almost all published in academic journals, not in books. So in their academic world, the journals are usually thought more important than books because most books are only textbooks.

As compared with the first type of studies, we could consider well the characteristics of the second type. They are low systematized, but the academic works can sometimes get very long lives, if they are extremely excellent. In humane studies, the books that were written in old times, even more than 2000 years ago, don't lose their value, for example Aristotle or Plato. We call them the classics. That is we study the humane studies through the classic works.

Of course the two types have common characteristics. The most important point is objectivity. All scholars have made all possible efforts to get objectivity in laboratory works, in observations, or in reading literary or historical articles. In such a way all sciences have been established. But there is a third type of studies, about which I will talk in next lecture (paper).

キーワード（Key Words）：人文学（humane studies）　民俗学（folklore study）
古典（classics）　教科書（textbook）　客観性（objectivity）

学問をシステムとして考える

わたしはこの講義[1]を，当面の目標である「民俗学」という一つの学問と，少し距離をおいたところからはじめようと考えています。それは日本の民俗事象を解説するという通常の目的のほかに，民俗学とはどのようにものごとを考えようとする学問なのか，ということもあわせて考えてみようとしているからです。

わたしたちの人文学類[2]には，民俗学のほかにさまざまな学問分野が存在しています。それらはいずれも，本学類が標榜するように，「人間とは何か」ということを考えることを目標にする[3]学問には違いないのですが，目標に至る道筋はそれぞれ異なっています。最も分かりやすい違いは何かといえば，もちろん各学問が扱っている素材（対象）にあるといってよいでしょう。すなわち歴史が，文学が，言語が，道筋を構成する素材にほかなりません。しかし素材の違いによる学問の違いというのは，実をいえば表面上のことにすぎないのです。もし人間の世界に学問というものが登場してきたすぐの時から，現在この世界にある学問のすべてが出そろっていたというならば，素材の違いが学問の違いだといいきってしまってもよいでしょう。しかし実際にはそうではありません。人間の長い歴史のさまざまな時代に，さまざまな学問が登場してきました。それは常に何らかの意味で新しい学問的素材（対象）の発見でありましたが，同時にそれらの素材（対象）を学問的に考える必要の出現でもあったのです。ですから新しい学問の登場とは，ものごとの新しいとらえ方，新しい考え方の登場にほかなりませんでした。いいかえれば人間は，その歴史のさまざまな時点でそのつど，人間の文化が到達した段階に応じた新しい学問を発見してきたのです。

そしていつか話をするつもりですが，民俗学は比較的新しい学問です。ですからそこには先行する学問にない，ものごとの独自なとらえ方とか考え方に関する主張が含まれているはずです。「人間とは何か」という同じ問いに答えを出すにしても，民俗学という学問の独自性とはどのようなものなのか，この学問をとおした場合にどんなことが見えてくるのか，わたしはこの講義でこういったことについても考えてみようともくろんでいるのです。同時にそういうことを考えるためには，民俗学のほかにどのようなやり方――「やり方」とはつまり学問のことです――があり，民俗学とはどのように異なっているのか，そんなことを考えるのも不可欠な作業でしょう。

さて学問とは，相当思い切った言い方をするならば，ある種の約束事の体系にほかなりません。学問は真理の探求であると言われます。わたしたちはそのことを信じて疑いません。しかし「真理」というものが，この世界のどこかに山のごとくにそびえたっていて，わたしたちはひたすらその頂をめざして登って行けばよい，というものではないのです。むしろ真理とか，その真理にいたるための様々な事実とかの姿をどのようなものであると想定するかは，学問それぞれに異なっているといったほうがよいでしょう。じつをいえば，何が真理であるかということだけでなく，誰がどういう手段をとおして真理を認定するか，ということについても学問それぞれの事情と歴史があるのです。つまり学問とはたんなる知識の体系にとどまらず，その知識を集積し，それを真理として認定し，さらに知識や真理，そしてそれらがもつ価値を世の中に広めていくこと，またそうした仕事にたずさわる研究者の世界を形成・維持していくこと等々，さまざまな営みを包含するシステムなのです。

ですからもちろん民俗学には民俗学としての学問システムというものがあり，そこには学問としてのものの考え方だとか，研究者としての独特のありかたといったものがあります。しかもそれはさらに，人文科学・社会科学の一分科として，人文科学・社会科学の存在態様に規定されざるをえません。第一講はそのタイトルを「人文学の基本システム」と名付けました。この一見民俗学と直接かかわりないという奇妙なタイトルは，わたしの場所から見てきた民俗学という学問の位置取り

のしかたについて話をしてみよう，という意図から生まれたものなのです。

文系と理系と

学問というものを大きく分類したとき，もっともわかりやすいものの一つは，「文系（文科系)」と「理系（理科系)」という分け方ではないでしょうか。高等学校などではこの分け方が早くから取り入れられていて，大学への進路指導の基本になってきましたし，世の中でもごくふつうに使われる言葉だろうと思います。

話をわかりやすくするために，文系・理系を，進学する大学の学部で表すことにしましょう。すると文系学部にはまずなんといっても文学部が筆頭にあげられ，ついで社会学部（文学部のなかに含まれることもありますが)，法学部，経済学部，商学部など伝統的な学部名を次々と思い浮かべることになるでしょう。このほか人間関係学部だとか国際関係学部などといった，比較的新しいネーミングではあるけれども文系といってさしつかえない学部が，最近ではずいぶん増えてきました。伝統的には哲・史・文，つまり哲学・史学・文学が文学部で学ぶ学問の中心にありました。そればかりでなくヨーロッパにおいて，これらの学問はいわば学問の王者としての地位に君臨してきたといってさしつかえないでしょう。

いっぽう理系の学部といえば自然科学を学ぶ学部がそれにあたり，理学部と工学部で代表されます。だいたいにおいて数学の素養が必須で，文系のほうでは，あたまからこれは苦手という人も少なくありません。ここでは物理学や化学，生物学などが伝統を誇り，最近では情報学などを加えて，現代社会での重要性を日に日に増しているのはいうまでもありません。

ところで少し本題からはなれるけれども，ここで考えておかなければならないことがあります。この文系・理系という分類は，世間一般で考えられているほどに自明なことなのでしょうか。

たとえば経済学という学問をとりあげてみましょう。この学問はさきほどの哲・史・文にくらべると，その成立ははるかに遅く，せいぜい200年ほどの歴史をもっているにすぎません。その初期にアダム・スミスとかカール・マルクスとかいった偉大な学者がでて，経済学の基礎を作りあげました。かれらは資本主義経済勃興期にあたって，生産→分配→消費→生産という経済循環の仕組みとか，労働とは何か，生産とは，価値とは何か，などなど多くの問題について考察を巡らしたのです。その考察はまことに徹底したもので，たんに効率よく利潤をあげていく方法を論じたというよりも，人間がつくる社会そのものについての思索でした。つまり初期の経済学とはたんなる経済の仕組みを解明する学問にとどまるものでなく，ある種の社会哲学であり歴史哲学であったといってさしつかえありません。その意味で経済学は社会科学であり，まさに文系の学問といえるものでした。

しかし現代の経済学は少々ようすがちがいます。社会的な効用による価値の形成過程や需要と供給のせめぎ合いを重視し，数学理論を駆使することによって分析を徹底させていくようになりました。今日の経済学の少なくともある部分は，ほとんど数学といってさしつかえないものになってきているのです。経済学の理論のなかには数式やグラフがひんぱんに現れ，定理だとか証明だとか，

数学でおなじみのことばがごく普通にとびかっています。社会哲学として出発した経済学がこのような数理科学としての面を強化してきたのには，もちろん理由があります。経済学が抽象的な社会思想ではなく，政策決定の手段になるにしたがって，その理論はより具体性を求められるようになりました。「おおむねこんな方向で政策を」などというあいまいな形でなく，予算や物資の配分とか人員配置などをめぐって明確な最適値を求められる以上，経済学の理論はいやおうなしに数学的にならざるをえなかったでしょう。

いっぽうその数学はといえば，世間一般の通念にしたがうならば，理系の学問の最たるものといえるでしょう。むしろ数学をとりいれることによって，経済学だけでなく社会学や心理学など多くの文系の学問が次第に理系化してきたのです。しかし数学の根本にたちかえってみるならば，それは単に計算の技術ではありません。証明するとはどういう行為なのか，論理的とはどのようなことを意味しているのか，理論が完全でかつ矛盾をもたないということはどのような事態をあらわしているのかなどなど，あまり数学という臭いのしない多くの問題が数学という学問の内部から提起され，重要な問題となってきました。数学の根本には重要な哲学的問題が存在し，したがって哲学研究者——つまり文系の学者の最たる人たちです——がしばしば数学の問題に対して発言をおこなっています。たとえばデカルトやバートランド・ラッセルという哲学者にしてすぐれた数学者であるという，偉大な学者がいたということを思い起こしましょう。数学は最も文系的な部分を，その中心にかかえこんでいるのです。

文系・理系の議論はさておいても，今日多くの文系の学問のなかに理系的なものがとりこまれ，あるいは学会とか業績の評価方法など社会的制度においても理系のそれをモデルにしようとしているのは，きわめて注目すべきことです。このことについてはいつかまた別の形で話をする機会があるかもしれません。

教科書というツール

さて，学年はじめの大学内の書店に足を運んでみましょう。そうするとあちこちの授業で使われる，さまざまな教科書やテキストが，最も目につきやすいところに山ほど積んであるはずです。毎年4月にはおなじみの光景です。

ところで教科書・テキストといっても，いくつかの種類にわけられます。その第一は文字通り，いわゆる教科書とよぶべきもの，つまりその学問の内容について，基礎的な概念や考え方から始まって，知っておくべき知識や理論を体系だてて記述してある書物です。『〇〇学概論』などといった書名がつけられていて，一般書店でも販売されるようなものから，その先生が自分の授業のために書き下ろした，いわば私家版のようなものまで，出版形態はさまざまなものがあります。第二のタイプは資料もしくはいわゆるテキストです。ですから厳密には教科書とはいえないかもしれません。各種語学のためのテキストや，言語習得よりは古典的な文学作品を読むための本文資料などがここには含まれます。第三のタイプは教科書というよりは参考図書とでもいうべきでしょうか。その授業の内容に即して，あるトピックについてより踏み込んだ内容が記述されている書物で

す。一定の理論を体系的に記述することよりも，その著作者の考え方や新しい理論の提示といったところに主眼があるわけですから，一般書店でも教科書としてではなく，普通の書物として販売されているものです。こうして三種類のものをならべてみていくと，第二のテキストは授業に必須のツールですし，第三のものは，下手をすると何のために買わされたのかわからなくなり，学生諸君からクレームがつくということにもなりかねません。ここで考えてみようとしているのはもちろん第一のタイプ，つまり教科書です。

このタイプの教科書が指定されているのは，かならずしもすべての教科ではありません。いわゆる理系の教科では，その多くがこうした教科書を利用しているようです。文系でこうした教科書を指定することがあるとすれば，たとえば経済学，法律学，社会学など社会科学に属する教科があり，ほかに言語学や心理学——心理学を文系といってしまってよいのか，さきほど述べたような現状から，すこしばかり迷いますが——などがあげられましょう[4]。

もちろん文系の学問にも教科書らしい教科書がないわけではありません。ただ実際には種類はかなり少なくなりますし，発行部数もそうたいしたことはないでしょう。私たちがこれから学ぼうとしている日本民俗学においても，これまでいくつか教科書を編むという試みがみられました[5]。しかし実際には——私個人の大変せまい見聞にすぎないかもしれないのですが——，教科書にしたがって一年間（あるいは１セメスター）を進めていくというよりは，自分独自の講義内容を計画するという教師のほうがずっと多いのではないかと思います。正直なことをいうならば，もし私の授業を教科書に即して進めていくことができるなら，毎週毎週講義の内容を考える苦労がずっと少なく，その点だけでもかなり楽になるだろうなと夢想しないわけではありません。しかしこれから述べるような事情によって，それはかなり難しいだろうと考えてしまうのが実情なのです。総じていうならば，教科書とは理系に一般的で，文系では比較的使われることの少ない教育ツールだといえましょう。

さて教科書とはそもそも何でしょう。いうまでもなくその学問や，ある一定範囲の理論について，必要な基礎知識をあげ，それらによって作りあげられた理論の体系を述べた入門書です。入門書といってもそれはあくまでその範囲における入門という意味であって，かならずしも「易しい」ということを意味していない場合もあるということには気をとめておく必要があります。大学での講義というのは一般に概論・概説といった授業が最初にあり，その後段階が進んでくると特講とか特論と称する講義形式の授業と，しばしばゼミナールと呼ばれる演習形式の授業に移るというように組み立てられているものです。教科書が使われるのはもちろん普通には最初の概説・概論の授業であって，特講は教科書とはあまりなじまない授業かもしれません。しかし決してそのように決まっているというわけではなく，相当に高度な内容にかかわる教科書というものもないわけではありません。必要があれば大学院の授業にだって教科書が使われるということもあるのです。つまり教科書とは，そこで説かれていることが易しいか難しいかということとは，直接には関係がありません。それよりも本質的なこととは，それが首尾一貫乱れぬ体系として，同時に標準的な理論として記述されているかどうかということなのです。

首尾一貫乱れぬ標準的な理論体系があるとはどういうことなのでしょうか。それはたとえば，誰

でもその教科書の記述にしたがって授業を進めていくことができるということです。たまたまその授業を担当している教師が病気になったり学会に出席したりで休講になりそうなとき，代講者をたてることができるということです。先週はここまで授業が進んだ，今週はどこからどこまでを講義すればよい，と正確な引継ぎさえあれば，代講者はその部分をとどこおりなく講義できるのです。もちろん講義とは生ものですから，その語り口が人によってかなりちがってくることはあるでしょう。何かを例示するとき，その事例のとってきかたは，おそらく講義者によってちがってくるでしょう。しかしだからといってある定理が，講義者によって認められたり認められなかったりということは決してないはずです。もちろん教科書の内容も万古不易というわけではありませんから，何十年もたてば書き換えなければならないこともでてきます。また異説をとなえている人がいて，それがある一定の存在意義をもっているのなら，そうした異説の存在に，その教科書自体が触れるということもしばしばあることです。けれどもそのような内容の変化や異説の存在といったことも含めて，教科書とは，長い時間をかけてその学問が積み上げてきた理論体系の記述にほかならないのです。だからこそだれでも——だれでもということは，教える側も教えられる側も，ということにほかなりません——安心してそれに依拠することができるのです。

さらに考えを進めてみましょう。教科書は教育上のツールであるだけでなく，研究のためのツールでもあります。この点については，従来あまり指摘されなかったことかもしれません。しかし考えてもみて下さい。たとえば20世紀のはじめ，アインシュタインが相対性理論を世に発表しました。物理法則があらゆる座標系に対し，同じ形式で表されるという発想と，その発想に基づく諸理論は時の物理学の世界にとってまことに画期的であったことでしょう。ですからそれはアインシュタインという天才によってのみ発想できたことであり，その意味するところをまったく理解できない研究者たちがその時代にはたくさんいたことでしょう。そのつぎにやってきた量子物理学になると，そのアインシュタインでさえも理解不可能な理論だったといわれています。しかし今日そのどちらにしても，もはや画期的な学説でも理解不可能な世界でもありません。少なくとも物理学者たちにとって，それはごく普通の常識的な物理学の理論にすぎないのです。それを理解するために，アインシュタインのような天才は少しも必要とされません。大学の理学部に入ったばかりの一年次生でさえその理論を知ることになるでしょう。物理学史が何十年か，あるいは何百年かをかけてようやくたどりついたある理論の高みに，天才ならぬ学生でさえも容易に立つことができます。研究の次の段階は，その高みからただちに始めればよい。こうして若い優秀な研究者の育成がきわめてシステマティックに行なわれるのです。しかし次々と積み上げられていく最先端の物理学理論は，やがてそう遠くない日に，大学の１年生を対象とする講義室で，ごく普通に語られることになるでしょう。もちろんその授業を聞いている学生たちの前には，新しい内容に書きかえられた教科書があるはずです。

教科書が教育の場で主導的な役割を果たしているということの本質は，たんに教室で教科書が使われるか使われないかというところにはありません。その学問が，理論の授受と創造の場においてどれだけ高度に組織化されているか，ということこそが重要な本質なのです[6]。

古典で学ぶということ

さて大学というところには，例外なく図書館が設置されているはずです。図書館というものの役割，とくに大学図書館の役割は近年急速にかわってきていて，いまや音声・映像資料や電子媒体による資料にまで収集範囲をひろげており，さらにはインターネットをとおして，世界に広がる情報ターミナルといった様相まで見せるようになってきました。しかしそれでもなお，図書そのものの収集が図書館にとってもっとも重要な役割であることにはかわりないでしょう。さまざまな学問に関する図書が体系的に収集された図書館，あるいは世の中に二つとない貴重な書物を保管する図書館がある，というのはいまさらくりかえすまでもないほど学問の発展にとって必要なことです。

と言ってみましたが，ここでまた考えておかなければならないのは，図書館に収集され保管される図書というものは，すべての学問にとって同じように重要で，同じように求められているのだろうか，ということです。するとここでまた文系・理系という少々荒っぽい類型をひっぱりだすことになるのですが，総じていえば図書館において図書を利用する度合いが圧倒的に高いのは文系だということになります[7]。とはいっても理系にとって図書館が不要だというのではなく，これはあくまで図書の利用に限っての話であって，理系図書館において必要とされるのはむしろ雑誌論文なのです[8]。簡単に言ってしまえば，現代の自然科学にとって図書館は情報ターミナルとしての役割のほうが大変強く求められる傾向にあります。というのは自然科学の論文というのは大変に寿命が短いというのが普通で，どれほど優れた画期的な業績であったとしても，その論文それ自体が数十年の寿命をもつということはありません。さきほど言ったように，理論はあとに続く研究者たちによってあっという間に洗練され，教科書に載せられてしまうことによって定式化されるからです。ですからたとえばアインシュタインの発表当時の論文をそのままの形で参照する発想というのが，自然科学にはもともとないのです。

いっぽう文系にとってはどうでしょうか。哲学を例にとってみましょう。さきにも言ったように，哲学はヨーロッパの学問世界において学問の王者でした。古代ギリシャ時代以来，数限りない哲学者が現れ，数限りない哲学書が著されました。ところで哲学というのは――私のみるところ――哲学的現象そのものの研究と哲学史の研究とが不可分なところがあるようです。そこで傑出した哲学者の思想それ自体を理解するために，彼らの著作，つまり哲学上の古典を読むということに大きな意義がこめられることになります。それゆえ，哲学の書棚からはアリストテレスが，デカルトが，カントがヘーゲルがいまでもいきいきと語りかけてくることになるのです。この点は授業においても同様です。だれかの哲学思想を語るとき，ほんの入門時期においては教科書的な説明があるかもしれません。しかしその時でさえその思想を自然科学がそうするように定式化して語ることはできないでしょう。教師による説明と同時に，著作のなかからの引用は不可欠です。ある思想が完全に定式化されることは決してなく，かならずその人自身の言葉で語られなければならないからです。だから学年が進んで理解が深まるにしたがって，またその人の著作の他の部分が引用されることになるでしょう。

ここで起こっていることは，たぶん教科書で学ぶ学問の世界から見れば信じがたい事態でしょ

う。100年，200年前，ときにはその10倍も昔の著作が生命力を失うことなく，今なお読み継がれている。たんに研究史の対象であるどころか，そこから何かを学ぼうと，現代の人々が本気で考えているなどとは。よくあることですが，研究が行き詰まった状態におちいったとき，発想の原点にもどろう，学問成立の初志にもどろうというので，初期の研究者の著作や思想が読み直されるのです。そのように時代を超えた力を発揮する過去の作品を，私たちは古典とよんできました。そして古典に学ぶという学問のありかたが，大学の学問のなかにはたしかに存在するのです。

文学の場合には，哲学とすこし様子がちがいます。ここで古典という言葉は二通りの意味合いで使われるでしょう。一つは文学作品そのもの。それも歴史のなかで高い評価が確立し，それゆえに研究する価値があると考えられている作品群です。もちろんこの種のものは文学作品のテキストとして授業には不可欠のものです。そしてもう一つの古典とは，過去の，しかし評価の確立したすぐれた研究のことです。文学研究の世界で多くの場合それは研究史上の著作であり，またときには哲学の場合と同じようにそれ自体が研究の対象になることもあります。そしてそれはある時には学ぶべき業績として，また他の時には批判すべき対象として私たちの目の前に現れるのです。したがって古典は教育と研究の両面で必須のツールだといえましょう。

そのように古典をとおして学ぶというとき，そこに教育の段階と研究の段階とが画然と区別されることはありません。古典は初歩の段階ならば初歩なりに，研究が深まった段階ならばまた深まったなりにさまざまな読み方ができるわけで，ある段階でそれが用済みになることはありません。またそのようにさまざまな読み方ができるということは，時代を超越するということでもあります。2000年前の著作，200年前の著作，さらに20年前の著作が同等の重みでもって読まれるなどということは自然科学ではありえないことでしょう。しかし文系のある種の学問にあって，それはきわめて普通のことであります。というより，そこにこそ人間を対象とする学問の本質があらわれているということにほかなりません。

客観性という基準

ここまでの検討によって，学問には大きく二つの類型があることがわかってきました。一つは哲学や文学のように古典によって学び古典によって研究する学問（第１類型），もう一つは自然科学のように教科書によって学び実験や観測によって研究する学問（第２類型）です。一方は人間の文明のなかで非常に長い歴史をもち，他方は近代社会の成立とともに私たちのものになりました。そしてそれらはいずれも大学というシステムのなかで育てられ，アカデミズムとして洗練されてきました。だが学問というのはそういう二つの類型だけに限られてしまうのでしょうか。そのことを考えてみようというのがつぎの課題になります。ただその前に一つだけやっておかなければならないことがあります。私たちは二つの学問類型の違いをたしかに見いだしました。しかしそれにたいして，きわめて重要な共通点も見ておかなければならないのです。そうしないと三番目の学問類型の特質や必然性が十分には浮き彫りにならないでしょう。

ここからは話を具体的にするために，上の第１類型，第２類型の学問をそれぞれ文学と物理学で

代表させることにします。その上でここまで述べたことをもう一度繰り返しておくと，文学は古典によって学び古典によって研究する学問だということ，物理学は教科書によって学び実験や観測によって研究する学問だということでした。それぞれが具体的に扱う対象，つまり事実というものがどれほどの広がりや多様性をもっているか，そしてそれをどのように扱うかという点に関していえばこれまたきわめて対照的です。

文学が扱う対象はテキストという形で私たちの前にあらわれます。すなわちそれは誰かによって作品として創られ，紙の上に定着したものです[9]。紙に書かれたものでしたら，それは当然のことながらものとして有限の素材です。もちろん時には新しいテキスト——手で書き写した写本にしろ印刷物にしろ——が発見されることはありますが，それを加えたところで無限の広がりをもってしまうほどでもないでしょう。研究者たちはこの世に有限の数しか存在しない資料群を対象として，それら相互の影響・書承関係を調べたり，そこに現れる表現だとかメッセージだとかを考えたりするのです。

文学研究において，研究対象はこのようにまず作品のテキストなわけですから，最初にしなければならない仕事というのは，テキストそのものの確定です。研究者たちはきわめて慎重に，あちこちに残存する一次テキストを読みくらべ，研究用にあやまりのない最終テキストを確定するのです。このあたりは歴史研究にも共通するところが多々見られるでしょう。なにしろどれだけ議論をたたかわせてみたところで，それぞれが皆別々のテキストに基づいて説をとなえていたとしたなら，話はすれ違うばかりで，少しも生産的ではないからです。ことばをかえれば，あらゆる議論の前提として，依拠する資料はまず公開され共有されなければならないということなのです。

いっぽう物理学に代表される自然科学においてはどうでしょうか。物理学においてそのデータは基本的に，実験と観察によって得られます。物理学的考察の対象となるのはあらゆる自然現象ですから，データの多様性は無限に広がるといってよいでしょう。ここでデータの広がりというのは，その性質においても量においても，という意味です。無秩序といってさえよいほどの広がりのなかからどのようにして傾向を，あるいは規則性を見いだすことができるか，ということが物理学の最初の課題です。ですから物理学の実験や観測は極めて慎重に，論理的に行われなければなりません。ここでいう論理的とはすなわち数学的ということとほとんど違いがありません。実験の条件を慎重にととのえ，実験室や実験装置をとりまく環境を同一に保ちます。そのうえである条件をかえたならば実験の結果がどう変化するのか。そしてその結果に違いがあったにせよなかったにせよ，それが統計学的にみて意味のあるものとみなせるのかどうかを検討します。こうした方法を比較研究といいます。比較研究とはたんに何かと何かを見比べるだけでは十分でありません。きわめて厳密な手順にのっとったときはじめて科学的に比較がなされたといえるのです。なにしろ対象は無秩序としか思えない無限の自然現象なのですから，そこにある一定の秩序を見いだそうとするならば，それだけの手続きが必要になるのです。

さらに自然科学において重視されるのは，再現可能性[10]という考え方です。ある実験方法や観測方法が妥当なものであるか，またそこから導き出された理論が妥当であるかどうかは，他の研究者が他の時，他の場所でおこなっても同じ結果が再現されることによって初めて保証されるのです。

さきほどの文学研究における資料の公開性と，ことばも手続きもことなりますが，研究の客観性を確保するための約束事を，両方の学問とも非常に大事にしているということにほかなりません。

文学と物理学を例にとって，二つの学問をくらべてみました。あたりまえのことですが，文系と理系の違いからはじまって，二つの学問は極めて対照的な姿をみせることがわかると思います。しかし反面，そこにはまた重大な共通点も見いだすことができるでしょう。

一つは，資料・データというものを大きな圧力でもって押さえ込んでしまおうという研究者＝人間の側の強い意志です。一方は作品を確実なテキストとして固定してしまうことに心血を注ぎ，もう一方では実験の環境を可能なかぎりコントロールすることで，原因と結果の結びつきを確実なものにするのです。

そして共通点の二つめは，さきほどのからの繰り返しになりますが，誰でもが同じデータにたどり着けるということでした。依拠する文学資料も実験・観察結果――ここにはその結果を導きだした方法も含まれます――も公開され，公開されたことによって共有されなければなりません。公開と共有とを根本ルールとして最重要視する学問世界のことをアカデミズムとよぶことができます。すなわちアカデミズムとは客観性を確保する方法論の共有にほかならないのです。

では，それらに対して想定される第３の類型とはどのようなものなのか，というのが私の第２講のテーマになります。

注

1．筆者が現在勤務する筑波大学では，第一学群人文学類において，おもに１，２年次生を対象とする講義「民俗学概説」（この授業は第二学群比較文化学類において「民俗学概説（文化人類学Ⅱ）」と呼ばれている）を開講している。人文学類には考古学・民俗学主専攻内に「民俗学・文化人類学コース」が設定されている。「民俗学概説」はそのなかでの入門的科目であるといえる。いうまでもなく民俗学を専攻しようとする学生たちにとっては必修科目であり，その後いくつかの専門科目を受講したのち，毎年10人台～20人台の学生たちがこの領域で卒業論文を書いている。本稿は筆者のこの講義にもとづいたものである。すなわち，2005年度およびそれに先立つ毎年４月，実際に教場で行われた第一回目の講義録に多少の手を加えたもので，これに「注」として若干の説明を補足した。ただし文章化の段階で考察の深まったところもあり，その部分に関しては講義録そのままといえない。しかしこの部分に関しても，次年度以降の講義に生かしていくつもりである。

2．筑波大学人文学類というカテゴライズの基礎となる人文学（または人文科学）という概念について，まずは事典的規定を参照するのが便利であろう。たとえば茅野良男は次のように述べる。「学問分類上の一名称。古典文学や哲学の研究を〈人文学 humanities〉と呼ぶのは，ルネサンス期の古典研究と〈人間性研究 humaniora〉の系譜をひく。日本で人文科学と呼ばれているのは，文学部，教育学部などの学科中，自然科学と社会科学とに属しないもの，すなわち広義の哲学，文学，史学の総称であり，実質的には文化科学から社会科学の大部分を除いた部分の総括である。人文科学は広義の文学，人文学と等義であり，人間の文化を創造する真の人間

性と，人間を客体化し対象化する科学・技術をもその契機とする真に人間的な事柄とに関する，基礎的諸学と解すべきであろう。」(『世界大百科事典』「人文科学 cultural sciences, humanities」の項)。

また社会制度のレベルで，人文学（人文科学）の内容がどのようなものであるかということをみるならば，一つは国家による規定があげられる。日本の場合を例示するなら，文部科学省科学研究費補助金における「人文学」という領域には，哲学，文学，言語学，史学，人文地理学，文化人類学が含まれる。そしてそれらは全体として，法学，政治学，経済学，経営学，社会学，心理学，教育学からなる社会科学に対置されつつ，一つのカテゴリーを形成する。

3．「人間は，自由にことばを操り，ものごとを論理的に思考し，豊かな社会を建設し，みずからの高度な文化を発展させてきたという点において，他の動物とは決定的に違っています。人間という種を特徴づけているこれらの要素をさまざまな視点からさまざまな方法に基づいて研究し，そして最終的に，人間とはどのような存在であるのかを客観的・総体的に把握し明らかにすることが，人文学類で行われている学問の内容であり目標であると言えるのではないかと思います。(改行) 人文学類は，哲学，史学，考古学・民俗学，言語学の四つの主専攻分野から構成されています。なぜこのような構成になっているかと言いますと，上で述べたような学問的目標を掲げるわたしたち人文学類にとって，この四つの分野が最も重要な研究の柱になるからです。」(筑波大学人文学類2005　傍点は筆者による)

4．経済学の領域で教科書の重要性を強調したのは，佐和隆光である（佐和1982)。佐和は「標準的教科書が存在することは，〈制度化〉された〈科学〉の要件の一つではある。鶏が先か卵が先かの議論はさておくとして，アメリカの大学院における「訓練」としての経済学教育の〈制度化〉と，経済学の「教科書化」は，おなじメダルの両面の関係にある」(同　p.81) と述べ，20世紀のアメリカ社会において経済学という学問が急速に制度として社会の内に定位された背景に，標準的教科書を通じた大学院教育があったことを指摘した。

5．今日も市販される民俗学教科書として，次のようなものがあげられる。
赤田光男・天野武・野口武徳・福田晃・福田アジオ・宮田登・山路興造（1984)，上野和男・福田アジオ・高桑守史・宮田登（編）(1987)，佐野賢治・谷口貢・中込睦子・古家信平（編）(1996)，福田アジオ・宮田登（編）(1983)，鳥越皓之（編）(1989)，八木透（編）(2000)

なお上野ほか（1987）は，ハンドブックと称しているものの，体系的な教科書に準じているといってよいので，ここに掲載した。

6．佐和は注4での記述に続いて，教科書は学術論文というものの意味もはっきりさせるという。なぜなら「教科書に書かれていることは，学界内部で共有されている知識である。したがって，教科書に書かれていないことを新しくつけ加えることが，独創的な論文の必要条件とされる」(佐和1982　p.85) からである。その学術論文に独創性の保証を与え，またそれを掲載する学術雑誌を発行するのが学会という組織の役割であり，学会を中心とした学問世界が形成されることになるのである。佐和はさらに経済学の古典的著作と教科書との位置づけについても，つぎのように興味深い指摘を行う。「(アメリカで) マクロ経済学を専攻する大学院生にしても，ケインズの『一般理論』を読破する者は，まず皆無と言ってよいだろう。難解で晦渋きわまりない『一般理論』を熟読玩味するという営みは，アメリカの大学院におけるマクロ経済学習得のためには，まったくの徒労であるばかりでなく，むしろ有害ですらありうる」

（同　p.83　傍点筆者）と。この後段での指摘は，筆者が先述した，学問というものが単に知識の集積や体系にとどまらず，一つのシステムとしてとらえられるべきであるという主張を支持するものとなっている。それゆえに佐和の議論は，たんに経済学という一学問分野にとどまらない普遍性をもっているといえる。

7．立教大学の図書館を一例としてあげてみよう。同大学では分野別図書館として，人文科学系，自然科学系，社会科学系という三種の図書館をそなえている。このうち人文科学系図書館の図書館資料は，図書が約20万冊，製本雑誌１万９千冊（うち継続受入中に雑誌は和洋合わせて約1500タイトル）であるのに対し，自然科学系図書館の図書館資料として，図書を約３万９千冊，製本雑誌を約３万冊を収蔵（うち継続受入れ中の雑誌は和洋合わせて約87タイトル）しているという。図書館資料の総冊数には大きな差があるが，これは同大学の人文科学分野と自然科学系分野の比重や，設立以来の歴史を反映していると考えてよいだろう。その点を考慮したとしてもおのおのにおける図書と製本雑誌の比率の差はきわめて大きい。ここに人文科学図書館と自然科学図書館において求められる図書館資料の形態の違いが認められよう。なお図書館資料冊数のデータは，同大学公式ウェブサイト（立教大学図書館 online）の記載によった。

8．東北大学図書館では学生のために，『東北大学生のための情報探索の基礎知識』という冊子を作成している。それはさらに『基本編』と『自然科学編』とにわかれており，とりわけ後者では自然科学を専攻する学生に特化した情報探索指導をおこなっている。2005年度版の『自然科学編2005』（東北大学附属図書館2004）ではつぎのようなことが述べられている。

自然科学における研究活動の流れのうち，成果の発表としては，雑誌論文，学会発表，特許，テクニカル・レポート，学位論文の５種類があるとされる。そして具体的な情報探索の方法をこの５種類について詳細に説明する（第１章「自然科学系の情報探索」，１．１「研究活動の流れと情報探索」）。いいかえればここで，いわゆる図書の探索はほとんど考慮されていないのである。そして図書についてはつぎのように述べる。「自然科学系の図書は，講義のテキストとして利用される場合が多く，あるテーマについて概説したものや，関連する論文を集めた形式のものもあります。「○○講座」や「△△全書」あるいは「××体系」というシリーズの本をこれまでによく利用したことがあるのではないでしょうか。いずれも複数の執筆者の手により，基礎的な理論についてわかりやすく記述されたものです。これらは新しい事実などを反映させるため，数年ごとに改訂を重ねています。また，基本的な内容記述を中心としているので…」（１．２「自然科学系情報源の種類と特徴」，２「図書」）。

すなわち図書の位置づけはあくまで概説書，教科書にとどまるということが，これらの記載から理解できるのである。

9．もっとも最近では口承文芸つまり口伝えの文学に対しても，文学研究からの関心がよせられるようになっていることも事実である。実際，日本口承文芸学会とか昔話研究懇話会（現在は日本昔話学会と改称している）といった，口伝えの文学を対象とする学会・研究団体が活動をはじめてから数十年がたつ。しかしこれが文学研究の主流になりうるかどうかとなると，筆者は少々懐疑的にならざるをえない。といってももちろん，口承文芸研究の意義が劣るかどうかということとはまったく別の問題である。

10．この概念はあまりに当然すぎる原則なので，おもてだって論じられることはほとんどない。しかしたとえば中谷宇吉郎（1958）は，「再現の可能な問題，（中略）そういう問題についてのみ

科学は成り立つものなのである」というところから，科学（この場合はいうまでもなく自然科学のことである）というものを説きおこしている。また実際，このルールに反したと見なされたり疑われたりする行為が，研究者生命を左右しかねない事態に発展することさえある（朝日新聞2005年９月14日記事などを参照）。

文献および Webpage

赤田光男・天野武・野口武徳・福田晃・福田アジオ・宮田登・山路興造1984『日本民俗学』弘文堂（弘文堂入門双書）

上野和男・福田アジオ・高桑守史・宮田登（編）1987『新版　民俗調査ハンドブック』吉川弘文館

佐野賢治・谷口貢・中込睦子・古家信平（編）1996『現代民俗学入門』吉川弘文館

佐和隆光1982『経済学とは何だろうか』岩波書店（岩波新書）

筑波大学人文学類2005『筑波大学第一学群　人文学類案内』筑波大学人文学類

東北大学附属図書館2004『東北大学生のための情報探索の基礎知識　自然科学編2005』東北大学附属図書館

鳥越皓之（編）1989『民俗学を学ぶ人のために』世界思想社

中谷宇吉郎1958『科学の方法』岩波書店（岩波新書）

福田アジオ・宮田登（編）1983『日本民俗学概論』吉川弘文館

八木透（編）2000『フィールドから学ぶ民俗学―関西の地域と伝承』昭和堂

立教大学図書館 online　http://opac.rikkyo.ac.jp/ アクセス日時：2005.9.1

補注

文末の「注」および「文献および Webpage」において online とあるのは，インターネット・ウェブページを指している。ウェブページの性格上，随時変更や消滅ということもありうるので，筆者が成稿以前，最後にアクセスした URL と日付を記しておくことにした。